

ラジオから「肉声」を聴くということ

——室生犀星『杏っ子』が明らかにする肉声の仮想性をめぐる問題——

広瀬 正浩

1. 問題設定

私たちは、肉声というものをどのように聴くのだろう。「マイクロフォンなどの機械を通さない、人間の口から出る生の音声」¹というような辞書的な意味において肉声を理解する限り、ラジオからそれを聴くことはない、と私たちは考える。ではもし、ラジオから「肉声」を聴いたという経験が何の衞いもなく語られてしまった場合、それに対してはどのような態度をとればよいのか。私たちはその聴取者の、あるいはその語り手の“誤認”を、訂正できるのだろうか。室生犀星の自伝的小説『杏っ子』²の中に、次のような一節がある。

平四郎はこの新築の家に越してから、近所の何処の奥さんか知らないが、すばらしい声を持つ人がゐて、お天気さへよければ往來で立話をしてゐるのが、書齋に聴えた。美しい声帯といふものは、普通の人の三倍くらゐに透るものらしく、大しておほさい声でもないのに、よく聴えた。お天気さへよければ起るといふ原因もあつたが、平四郎は書き物の手をやすめて、もつと、喋つてゐてくれればよいと思ふが、声はあまり永くつづかないで、すぐ消えた。／平四郎はラジオの場合でも、或る婦人放送員の声だけが聴きたさに、ただの何秒間かの紹介放送を聴くことがあるが、それはその人の美しい肉声が世界で有名な音楽家の音楽よりも、女としてのけふの美しさを耳にいれてくれるからであり、平四郎はその人の声をきくために、スイッチを入れ、人ちがひだつたりする場合が多く、次ぎからスイッチを入れるに忙しいことがあつた。³

『杏っ子』は、作家・平山平四郎とその娘・杏子の生に焦点を当てた物語を軸とした小説だ。右の引用は、この小説を論じる上で、これまで特に注目もされなかった箇所である。ここで、「或る婦人放送員の声だけ」を聴くためにラジオのスイッチを入れようとする平四郎の姿が描かれている。彼はラジオの音声を、「女としてのけふの美しさ」を湛えた「その人の美しい肉声」として聴取するのだ。

ラジオの音声が「肉声」として聴き取られるという事態を否定しようとする私たちが思考の基礎にするのは、電子メディアによって発声者の身体と声との「いま・ここ」での結びつきが切断され、そのために声が、還元されるべき「肉」を欠いたまま「いつでも・どこでも」聴取者のもとに届けられることになる、という理解だ。だが、メディア利用者の経験の多様性を検証することを議論の狙いの一つとするとき、上のような理解に基づく予断は望ましいものとは言えない。平四郎によるメディア経験を虚偽のものだと解するのではなく、むしろラジオから「肉声」を聴き取るという経験が実はある

¹ 新村出編『広辞苑』第五版(1998年、岩波書店)、2022頁。

² 室生犀星『杏っ子』(1957年、新潮社)。初出は『東京新聞』1956年11月19日～1957年8月18日。

³ 『室生犀星全集』第10巻(1964年、新潮社)、121頁。

水準においては成立しうるのだという見通しをこそ、ここでは探るべきだろう。「肉声」をめぐり問う方を変えるということ。これにより、私たちの一般的なメディア理解において共有されている「いま・ここ」という概念自体を括弧に入れ、それとは別の水準の「いま・ここ」に目を向けることができるのではないか。そのような態度こそが、電子メディアと身体を政治を多角的に捉え直す回路を開く契機となるはずである。

本稿の狙いは、『杏っ子』という小説においてさりげなく語られたメディア利用者の態度を手掛かりに、ラジオの音声が「肉声」としてのリアリティを帯びるような事態に巻き込まれる聴取者（あるいは発話者）の存在のありようについて考察していくことにある。平四郎が行った「肉声」の聴取は、電子メディアによる声の現前性をめぐり重要な問題提起の契機を孕むものであった。そのような契機を、本稿では真摯に受けとめてみたいのである。

2. 初期ラジオ放送における受信機と聴取者の関係

そもそも日本における本格的なラジオ放送は、1925年に始まった。3月22日に仮放送が行われ、7月22日に愛宕山の施設からの本放送が開始された。これ以降ラジオは国民的メディアとして受容されていく。しかし戦後、1950年代後半にテレビが全国的に普及するに及び、これまで国民にとって最も重要なメディアであったラジオがその座を奪われることとなる。『杏っ子』が執筆され発表されたのはこうしたラジオの退潮期であったが、先の引用の平山平四郎のラジオ聴取自体は、メディアとしてのラジオの全盛期でもあった戦時期において成立したものと語られていた。この時期画定は、関東大震災のあった1923年に生まれた杏子がこの時点で19歳であることや、「アナウンサー」という「敵性語」が使用されず「放送員」という語が用いられていることなどから判断できるものだ。実はこの当時は、多くの人々がラジオを「かけっぱなし」つまり常にスイッチを入れた状態にして聴いていた⁴。ラジオによる戦果の報告を聞き漏らしたくないという聴取者心理が、ラジオを「かけっぱなし」にして聴こうという傾向を生んだのだ。そうした状況を踏まえると、「或る婦人放送員の声だけが聴きたさに、ただの何秒間かの紹介放送を聴く」という選択的・限定的聴取は、この時代においてはいささか特殊なものであったと言えよう。以下、平四郎のラジオ聴取のあり方を歴史的な状況の中で理解するためにも、ラジオ放送の初期における受信機と聴取者の身体性について整理しておきたい。

前述のようにラジオを「かけっぱなし」の状態に聴取することが可能であったのは、おそらく、聴取者とラジオ受信機とが物理的に隔たっていたからだ。ラジオを「かけっぱなし」にするというラジオの音声の日常化は、聴取者の位置を、ラジオの音声とそれ以外の日常音とが並存している空間の中に規定する。彼らが日常生活を営みつつラジオの音声にも耳を傾けるためには、ある単独の音声のみの聴取を強制されないような位置を聴取者自身が確保しなければならない。そのためにも、ラジオの音声を相対化できるような位置取りとして、聴取者は受信機のモニターから離れてラジオを聴くのである。このように聴取者がラジオから物理的に隔たっていたからこそ、聴取者はラ

ジオの音声に支配されずに日常生活を営む自由を獲得すると同時に、ある特定の人物によってその音声は占有されることなく一度に多くの人が聴取することが可能になった。戦時期の日本において、ラジオが総動員体制の確立の契機となったのも、この物理的な距離とは無縁ではないはずだ。

しかし、このような受信機と聴取者の関係は、決して絶対的なものではない。

ラジオ放送が開始された当時、人々は、二種類の受信機を利用していた。真空管式受信機と、鉱石式受信機である。初期の真空管式受信機は、受信機本体から上方に突き出た「ラッパ」と呼ばれる漏斗型の管の先の開口部をモニターとするもので、店舗などの公共的な場所に置かれることが多かった。鉱石式と比べて感度も良かったこともあり、その後改良が加えられ、モニターの位置も本体側面に移り、1950年代にトランジスターラジオが登場するまで受信機の主流であった。この受信機を用いる限り、聴取者と受信機との隔たりは無化されることはない。だからこそ、多くの人々が集まる公共的な場にそれは置かれたのである。

もう一方の鉱石式受信機は、針先で感度の良い箇所を探りながら電波を受信して音声を聴く「さぐり式」とも呼ばれるもので、基本的に感度は不安定ながら、本体そのものの仕組みが簡単で自作も可能であり、値段も安く、家庭用受信機として初期の人々の間に広く普及した。しかしこの鉱石式の最も大きな特徴は、「受話器」と呼ばれるヘッドホン型のモニターを頭に装着して、発声装置を直接耳に押しあてて音声を聴くという点にあった。鉱石式受信機のモニターがヘッドホン型であったのは、微弱な音量しか出音できなかったためであったが、受信機のモニター部分と聴取者の身体との物理的な隔たりが限りなく解消されたラジオ聴取がこれによって成立したのである。

当時の人々は、モニターの型と聴取者の身体との関係性がラジオの音声に対する聴感を規定するということを強く意識していた。例えば詩人・劇作家の長田秀雄は1925年の受信状況の説明として、「真空球のついた受信機は、何うも不自然に音を拡大してあるから、雑音が多くてその上真実の音から遠い。これに反して、鉱石の検波器のついた奴は、音が小さくて、ラウドスピーカアは働かないが、レシーバーで聴けば、はるかに雑音が少なく音も澄んでいる」⁵と述べている。雑音が多いラッパ型の真空管式受信機とは対照的に良質な音声を出音するものとして、ヘッドホン型の鉱石式受信機は受容されていたのである。たしかに、「受話器」を頭に装着することの違和感が、「頭へ金属の鉢巻をして迄も（略）」⁶などと語られることもあったが、そうした違和感にもまして、ヘッドホン型モニターによるラジオ聴取の快適さが強調されたのである。

初期のラジオ聴取者にとっては、放送内容以前に、遠くの声が近くに感じられるという素朴な事実が興味の対象であった⁷。彼らの興味は、物理的な距離に強く規定される通常の対面的なコミュニケーションとの比較においてラジオを捉えようとする意識へと接続する。既に見たように、ラッパ型の真空管式受信機から発せられる質の悪い音声、長田秀雄は「真実の音から遠い」と評していた。「真実の音」なるものを基準にしてラジオの音質を査定しようとする長田は、「真実の音」を聴くことができるような場をどのようなものとして想定しているのだろうか。長田自身は明言していないが、おそらく、メディアを利用せず発話者と聴取者が生身の人間同士として「いま・ここ」で向き合っていく対話の実践においてこそ「真実の音」を聴くことができ、と長田

5
長田秀雄「受話器を耳にして」(『中央公論』第40巻第12号、1925年11月)、108頁。

6
吉村冬彦「路傍の草」(『中央公論』第40巻第12号、1925年11月)、117頁。

7
「いまの状態では、まだ、ラヂオが、発達の途上にあるのと、日本で放送が始まって間がないので、丁度、私が、上海を始めてきて喜んだ時のやうに、たゞ、遠方のをきとか、或は、どれだけ原音に近い音が聴こえるとか云ふ方面が享樂されてゐるのである。／＼ラヂオだけの本来の目的から云へば、さうなるのが至当であらうが、私は、やはり音楽を楽しむのが、本統だと思つてゐる。つまり今のファンは、本当の意味でラヂオファンが多くて音楽のファンが少ないのである」(長田秀雄「受話器を耳にして」)、107頁。

は考えていよう。

モニターを直接的に耳に接触させるヘッドホン型の受信機は、発話者が聴取者の耳に直接囁きかけるような感覚を喚起する。発話者と聴取者との関係があたかも無媒介的であるかのような——「いま・ここ」で両者が繋がりが合っているような錯覚を、この受信機は聴取者に対して許容するのだ。このようにもたらされる聴取者の錯覚こそが、「真実の音」なるものを基準にしてラジオを聴取しようとする長田秀雄の想像力を支えるのである。そしてそのような想像力の範疇で、「肉声」への意識も形成されることとなる。

萩原朔太郎は、東京本郷の街頭に置かれたラッパ型受信機によって、初めてラジオの音声を聴いた。「ラヂオといふものを、大変ふしぎなもの、肉声そのまま伝わってくるものと思つてみた私は、この不自然な器械的の音声を、どうしてもラヂオとは思へなかつた」⁸。しかしその後、「受話器を耳に当て、聴く」タイプのラジオの音声を聴く機会を得て、「これで聴くと実によく聞こえる。不愉快な雑音も殆どなく、まづ実の肉声に近い感じをあたへる」⁹という印象を持つことになる。先にみた長田秀雄と同様に萩原朔太郎もまた、ラッパ型のモニターによるラジオ聴取とヘッドホン型による聴取との間に聴覚上の差異を見いだしている。朔太郎の場合は音質を問題にする際の基準として、「実の肉声」の音を措定している。朔太郎はラジオの音声を聴く以前は、発声者の「肉声そのまま伝わってくる」のだと“誤解”していたわけだが、それは、発話者と聴取者との関係を「肉声」によって構築したいという朔太郎の潜在的な欲望の反映として見てよいだろう。ただ、朔太郎が聴いたのはあくまで「実の肉声に近い」音であつて、「肉声」そのものではない。

長田秀雄と萩原朔太郎が共に意識したのは、「肉声」や「真実の音」との近さによって逆に浮き彫りとなる、「肉声」や「真実の音」からの隔たり、「肉声」や「真実の音」に到達することの不可能性であつた。だが、ラジオの音声を「真実の音」「実の肉声」からの距離によって理解しようとしているということは、聴取者は潜在的な水準で、発声者を相手とした「肉声」による「真実の」コミュニケーションを希求しているのである。到達することが不可能であると強く意識されるからこそ、それを求めようとする欲望が無限に喚起され続ける。初期のラジオ聴取者たちは、ラジオという新しい電子的な音声メディアの経験を楽しみながらも、そうした経験には還元され難い「肉」を感じていたいという欲望をも抱えていた。

しかし、そのような到達不可能な「肉声」に対する欲望は、やがて衰退していく。その要因の一つには、ヘッドホン型受信機が徐々に姿を消し、モニターと本体の一体型へとラジオ受信機が画一化していったという事実が挙げられよう。既に論じたように、モニターを直接耳に接触させる仕方でのラジオ聴取は、発話者と聴取者の関係が無媒介的であると聴取者に感じさせる契機であつた。この錯動的に感得される無媒介性こそが、「肉」感への欲望を喚起していたわけだが、モニターと本体が一体化した受信機の形状が恒常化したため、受信機と聴取者との物理的な隔たりが固定化されることとなり、「肉声」を聴きたいという聴取者の欲望がその欲望の淵源を失ってしまうのである。

また、ラジオが登場した当初は人々もそれを新鮮に受けとめていたが、ラジオを聴

8

萩原朔太郎「ラヂオ漫談」(『中央公論』第40巻第12号、1925年11月)、95頁。

9

同前、96頁。

くことが人々の間で日常化し放送文化が成熟していくと、音質自体への関心よりもコンテンツへの関心が高まっていく。当時の言説を概観しても、音質をめぐる議論はほとんど見られず、ラジオにおいて放送すべきコンテンツをめぐる議論が活発化していったことがわかる。特に戦争を迎える時期においては、そうした傾向がより顕著となる。発話者をどれだけ近くに感じられるか、どれだけ「真実」のコミュニケーションに近づけるかという関心よりも、ラジオを通じてどのような物語（ニュースや音楽を含む）を受容するかという関心が高まるのだ。ラジオ聴取者の想像力は、「肉声」を還元させるべき発話者の「肉」をイメージできないものとなり、聴取者は、自分が聴くラジオの音声における「肉声」との近似性を問う視座の外部に位置づけられることになるのである。しかしこのような状況においてもなお、『杏っ子』の平四郎は「肉声」を聴取しているのだ。果たして平四郎は、ラジオを通じて何を経験していたのだろうか。

3. 発話者が現前化する空間

「肉声」とは本来、生身の人間同士が直接向き合った対話等において、両者を媒介するものとして考えられてきた。より抽象的に言えば「肉声」は、発話者の生身の身体に還元される、声の直接的な現前の様態を指すものと言えよう。しかし『杏っ子』の平四郎は、ラジオというメディアを通じて送信される音声、つまり生身の身体には還元されない声に「肉声」を感じ取っている。平四郎がラジオを利用しながらも発話者との間に「肉声」を媒介とした関係を構築するためには、両者が互いに直接的に現前し合うことができるような次元を、生身の身体から離れて共有する必要がある。では平四郎は、発話者——婦人放送員との間でどのような次元の共有を図っていったのか。順に手続きを踏みながら考えていきたい。

本稿冒頭の引用で、平四郎の「肉声」聴取のエピソードが、近所に住む「奥さん」の「すばらしい声」を書斎で聴いた挿話と並置されて語られていたことを思いだそう。声の聴取をめぐるこの二つのエピソードは、メディアを介した聴取であるか否かという点では異なる関係にあるが、平四郎からは見えない発信源からの音声を聴き取ろうとしている点では、両者は共通している。この引用部分における二つのエピソードの並置は、ラジオから「肉声」を聴き取ろうとする平四郎の態度が、不可視の存在を目の当たりに感じようとする欲望によって構成されたものであることを強調する、『杏っ子』の語り手の示唆であると読むことができよう。

では、「或る婦人放送員の声だけが聴きたさに、ただの何秒間かの紹介放送を聴く」という、任意の音声を選択的に聴取する態度についてはどうか。この平四郎のラジオ聴取については、同時代において行われていたという「かけっぱなし」の聴取との対比によって考えるといい。「かけっぱなし」においては、ラジオの音声は他の現実音と相対的な関係にあるため、聴取者の集中力は散漫になりがちである。一方、任意の音声を選択的に聴取しようとする平四郎の態度は、「かけっぱなし」とは違って聴取に深く没入するため、ラジオの音声を絶対的なものとして志向することになる。このとき聴取者である平四郎は、いわゆる現実世界の音声への意識を希薄化させ、言い換えれば現

実世界の音声に対する聴取者としての身体をその現実世界に置き去りにして、ラジオという電子メディアが可能にしている空間に存在する者として、自らの身体を新たに構成しているのだ。平四郎は、現実世界としての「ここ」には不在の、不可視的な存在である発話者の声を、電子メディアが可能にしている空間としての「ここ」において聴いている。つまり、ラジオの音声を集中的に聴取しようとする平四郎の身体はこのとき、二つの異なる空間の間で引き裂かれていることになる。

こうした身体の分裂は、ラジオ聴取者だけでなく、発話者においても生じることだ。放送室のマイクロフォンの前という「ここ」において自らの声を発する発話者は、その声の電子的な増幅を通じて、「ここ」から遠く離れた複数の聴取者の「ここ」に発話者として現れる。その意味でも発話者は、生身の身体を超えた、拡散・分裂した身体性を獲得していることになる。さらにこの発話者は、聴取者によって自らの声が聴き取られることによって発話者としての自己同一性を自ら承認することができるようになるのだが、その場合の聴取者は、既に論じたように電子メディアによる空間においてその身体を構成している存在であるため、この聴取者によって見いだされていく発話者の身体もまた、電子メディアが可能にする空間において構成されたことになる。このとき、発話者と聴取者は、互いに自己分裂を引き起こしているという点で、同じ資格を持つ者同士となる。そして、両者が互いに相手に対して直接的に現前し合うことが可能になる条件が整ったことになる。

平四郎がラジオから「肉声」を聴くとき、彼の身体は、電子メディアが可能にする空間において構成されていた。そしてそのような彼の身体性によって規定される発話者＝婦人放送員の身体もまた、電子メディアによる空間に位置づけられていることになる。両者はそれぞれに生身の身体を通じて経験している「ここ」を離れ、電子メディア的な身体を通じて、「肉声」が聴きとれるような距離で出会っているのだ。平四郎がラジオの音声を「肉声」として聴いたというこの出来事は、『杏っ子』の語り手による単なる“語り間違え”でもなければ、作者・室生犀星の筆の滑りでもなく、電子メディアに接続することによって利用者が被ることになる、身体の分裂化・複層化の問題を浮き彫りにする政治性を内包するものであった。

しかし、ここで議論を拙速に進めてはならない。ラジオの発話者と聴取者がそれぞれに分裂しているという理由によって、両者は現前し合い「肉声」を聞くことが可能になる、というのではない。両者のそれぞれの性格が規定されているが故に、両者の関係性が構築されるわけではないのだ。因果関係としては、むしろ逆である。両者の関係が、『杏っ子』の語り手によって“「肉声」を媒介した関係”として規定されるからこそ、両者の身体性の水準が事後的に追認可能になるのである。つまり、平四郎がラジオを通して婦人放送員の「肉声」を聴いたという事態が『杏っ子』の語り手によって示されたことで、平四郎と婦人放送員の身体をそれぞれ分裂したものとして認めることができるのだ。

本稿では『杏っ子』の語り手によってその存在の可能性が掘り起こされた、電子メディアが可能にする空間において構成される身体のことを、便宜的に《電子メディア的身体》と呼んでおくことにする。ラジオの音声は、聴取者からは遠く離れた場所において確かに現前していた声を電子的な技術によって「表象＝再現前」したものでは

なく、《電子メディア的身体》同士の間で現前し合う声である。ラジオから「肉声」を聴くという平四郎の態度はつまり、これまで「表象＝再現前」として理解してきたものを「現前」として捉え直す、認識の転換を私たちに要請するものであったのだ。

ただし、ここで注意したいことがある。平四郎は、ラジオを通じて婦人放送員の「肉声」を聴取しようとする理由を、「その人の美しい肉声が世界で有名な音楽家の音楽よりも、女としてのけふの美しさを耳にいれてくれるから」と語っていた。このような平四郎の動機の基底には、婦人放送員の「美しい肉声」が「女としてのけふの美しさ」を喚起するのだという思考があるが、この場合の「美しさ」は、《電子メディア的身体》に内在する「美しさ」だということになるだろう。男性の、ではなく、女性の美しい声に対する平四郎の欲望は、《電子メディア的身体》の女性性への欲望でもあるのだ。《電子メディア的身体》をめぐる性差、またはその性差によって喚起される欲望とはどのようなものであるのか。こうした新たに生じる問題について、残りの紙幅の範囲で考えてみたい。

まず最初に見たいのは、『杏っ子』の作者・室生犀星自身のラジオの経験¹⁰における欲望のあり方だ。1950年10月、室生犀星の小説「山吹」が樫村治子の声によって朗読放送された。樫村は放送前の打ち合わせの段階で犀星宅を訪れているが、このとき犀星は樫村を見て、「ふちなし眼鏡がきらきらしてゐて、それが調和を美貌の上に加へてゐる人」¹¹という印象を抱いた。しかし朗読放送後、「意味の判らないところがなかった。朗読はそれだけでいいのである。しかし彼女のふちなし目がねのきらきらしたところは、残念ながら聴きとれなかつた」¹²という感想を持つのだ。犀星は、朗読する声そのものに期待しているというよりもむしろ、声を通じて発話者の身体性、つまり樫村治子の「美貌」が喚起されることを期待していたのだ。もちろんこの「美貌」は、現実世界における生身の樫村治子が有している「美貌」である。しかし、そのような犀星の期待は「残念」なものに終わってしまった。犀星に対して直接的に現前していた生身の身体と、ラジオの音声を通じて立ち現れた身体との間に差異があることを発見したからだ。犀星が当初において認めようとしていた、《電子メディア的身体》の性的魅力と生身の身体との連続性は、彼自身のラジオ聴取を通じて否定されてしまったのだ。

しかし、そのような非連続性の一方で、その非連続的な両者を再接続しようとする欲望もまた構築されることになる。そうした欲望によって対象化されるのが、女性アナウンサーという存在であり、ラジオドラマの「ラヂオ女優」という存在である。

1932年に公募第一号の女性アナウンサーとして採用された松澤知恵¹³は、アナウンサーとしての仕事を始めた当時、声に「軟かい女らしさが無い」と言われ、「マイクを愛人と思つて、愛人に話す様な調子を出せば女らしくなるだらう」などと暴力的な助言を先輩から受けていたという¹⁴。マイクによって規定される松澤の声は、女性としての性的特徴を欠損させたものとして囲い込まれていたのだ。そんな松澤は、「女らしいアナウンスメントは婦人アナウンサーの使命である。女が男と同じ調子でやれば婦人アナウンサーの特色はなくなつて了ふ。女が女らしい調子でやるのは最もやさしくて、最も難しい事とも云はれやう」¹⁵と述べる。なぜ松澤は、「女が女らしい調子でやる」という「最も難しい事」を担わされたのか。それは松澤およびその周囲の者たちが、電子メ

10

「室生犀星年譜」(室生朝子・本多浩・星野晃一編『室生犀星文学年譜』1982年、明治書院、418頁)によると、犀星はまだラジオが新しいメディアであった時期でもある1934年1月に京都に滞在した際に、多田不二の依頼を受けて、京都放送局の開局記念の放送に出演を果たしている。そして自らの放送経験を生かし、同じくラジオ出演を行う萩原朔太郎に助言をしている(萩原朔太郎「初放送の記」、『放送』第8巻第2号、1938年2月、35頁)。しかし、1952年9月19日に犀星宅を訪れた放送局の一戸久からラジオ出演を依頼された際、犀星は「いままで放送は一度もしたことはない」と、過去の経験に齟齬するような内容の日記を記すのである(『室生犀星全集』別巻2、1968年、新潮社、42頁)。ここに犀星のラジオに対する分裂した心情が見て取れよう。一方、犀星のテキストが、朗読やラジオドラマなどの放送コンテンツとして選ばれることもあった。このテキストの音声化の問題をめぐるのは、坪井秀人(『声の祝祭 日本近代史と戦争』1997年、名古屋大学出版会)や黒田大河(『「国民」統合の〈声〉の中で〈書く〉こと 雑誌「放送」に見る戦時放送と文芸」、木村一信編『文学史を読みかえる4 戦時下の文学』2000年、インパクト出版会)らによる検証がある。彼らの仕事は主に、犀星テキストの音声化が、戦争への国民の動員に一定の役割を果たしていたことを浮き彫りにするものであった。だが、当の犀星自身がどのようなラジオ聴取者であったのか、あるいはどのような声の送り手であったのかについては、これまでほとんど問題にされてこなかった。

11

1950年10月1日の室生犀星の日記。引用は、『室生犀星全集』別巻1(1966年、新潮社)、332頁。

12

1950年10月24日の室生犀星の日記。引用は、『室生犀星全集』別巻1、336頁。

13

日本で最初の女性アナウンサーは、東京放送局の総裁・後藤新平の推薦で1925年に入局した翠川(緑川)秋子であった。断髪洋装という翠川の容姿は、女性アナウンサーの「尖端的」なイメージを構成するのに一役を担った。料理番組などを担当したが、局内の男女間の問題などでほどなく辞めてしまう。その後東京放送局は二名の女性アナウンサーを登用し、1932年に松澤知恵を迎えることとなる。松澤は1937年に体調を崩して以降アナウンサー職を離れ、教養部に移籍した。1950年に室生犀星の「山吹」が榎村治子の声によって朗読放送される際には、松澤は担当者として榎村と共に犀星宅を訪れている。

14

松澤知恵「私のアナウンサー時代」(『放送』第9巻第10号、1939年10月)53頁。

15

同前、53頁。

16

『声』から生まれるラヂオ役者(『東京朝日新聞』1925年9月25日)、11面。

17

「鈴を振る様な声 顔も姿も美しい ラヂオ女優志願に熱心な谷口う子さん」(『東京朝日新聞』1925年9月27日)、11面。

ディアによってもたらされた自らの身体の分裂が決定的なものであったということを経視していたか、もしくは無自覚だったからだ。もし松澤が自らの《電子メディア的身体》を、生身の身体とは別次元の自分自身の存在として了解することができれば、言い換えれば《電子メディア的身体》を松澤が生きていければ、性的な言葉の暴力に対抗する立場を獲得できたかもしれない。しかし、アナウンサーの先輩(男性)から生身の身体と《電子メディア的身体》との性の一致を要請され、松澤もまたその要請を「使命」として内面化してしまったため、彼女は次元の異なる身体同士の連続性を顕在化させるという極めてアクロバティックな実践＝「最も難しい事」を負わされてしまったのだ。

こうしたラジオで発話する女性に向けられる要請は、ラジオドラマの制作現場にも見られた。ラジオドラマは、当初は舞台役者や映画俳優など、既存の視覚的な演劇表現において活躍していた者たちが出演していたが、新しい独自の表現を模索していくプロセスで、「ラヂオ役者」「ラヂオ女優」を募集・採用しようとする動きが活発化した。このとき「ラヂオ役者」という存在に向けられたのが、「舞台劇や映画劇と異つて面ばうやスタイルなどはてんで問題とせずびつこでもめつちかちでも声の素質が好くて創造的熱意があれば第一条件は満たされる」¹⁶(傍点原文)とする想像力である。ラジオドラマ制作者側は、ラジオの声によって顕在化する《電子メディア的身体》の美的価値を生身の身体を持つ美的価値とは異なるものとして指定し、聴取者の欲望を介してその美的価値を対象化する。ただ、ラジオ役者を募集する語りに見られる「容姿が悪くても声が良ければ大丈夫」といった考え方は、潜在的に、発話者の生身の容貌の善し悪しを査定しようとする視線を有している。そしてそのような視線は、「めつちかちでもなければ、びつこでもない容ほうと云ひ、姿と云ひ練習さへ積めば実演にもキネマにも立派な女優になれやう」¹⁷などという言説と連動することで、美しい声の発声者の姿を直接的に眺めたいという別の欲望を立ち上げることになる。その意味では、女性発話者の《電子メディア的身体》の有する美的価値は、彼女の生身の身体の美的価値とは完全に切断されてはならず、むしろ生身の身体の美的価値の質によって《電子メディア的身体》の美的価値は規定されていたのだ。

ここまで見てきた範囲で整理しよう。電子メディアの利用者は、生身の身体に付帯されている性的特徴や美的価値とは異質な特徴や価値を、メディア利用によって分裂化したもう一つの身体——《電子メディア的身体》に見いだそうとした。しかし、そのような《電子メディア的身体》の性的特徴や美的価値の査定が行われるとき、その査定基準として動員されるのが現実の生身の身体である。《電子メディア的身体》がどれほど現実の身体と同質性を持つものであるか、あるいは差異を持つものであるかを問うような視線が、この《電子メディア的身体》には注がれている。こうした視線を支えているのはおそらく、メディアを通じて顕在化する身体を、現実の生身の身体「表象」と捉える想像力、もしくは現実の身体に対して擬似的に存在する「仮想的身体」と捉える想像力であろう。《電子メディア的身体》を「仮想的身体」「表象された身体」と捉える見方は、その身体を観察する者を現実の空間に留め置いてしまうことになる。こうしたあり方はしかし、『杏っ子』の平山平四郎の場合とは著しく異なっている。

ラジオから婦人放送員の「肉声」を聴取する平四郎は、婦人放送員の《電子メディア

ア的身体》を欲望することはあっても、彼女の生身の身体を欲望することはなかった。平四郎はラジオで彼女の声を聴くことはできるが、彼女の生身の身体とは対峙していないため(少なくとも『杏っ子』の語り手はそのように語っている)、《電子メディア的 身体》の美的価値を査定するための基準として彼女の生身の身体を参照することができない。平四郎にとって婦人放送員の《電子メディア的 身体》は、「仮想的 身体」でもなければ、「表象(再現前化)された 身体」でもない。自らに対して直接的に現前する「肉」そのものなのである。平四郎は、「肉声」を発する《電子メディア的 身体》の価値を、何ら現実に依拠することなく承認するのだ。なぜなら、彼自身もまた《電子メディア的 身体》であり、現実に依拠することが可能な空間とは異質な次元において構成された存在であるからだ。『杏っ子』の語り手が示唆したのは、現実への依拠という態度自体が相対化されてしまうような電子メディアの経験の可能性であった。

4. 「肉声」「現前」を問うことの意義—まとめにかえて

本稿では、小説『杏っ子』の一場面注目し、ラジオから「肉声」を聴くという事態の成立可能性を検討しながら、メディア利用者の身体の分裂について論じてきた。『杏っ子』自体は、メディア利用のあり方を中心的に扱った小説では決してない。本稿の第一節でも触れているように、平山平四郎とその娘の杏子の生に焦点を当てるということが中心にあり、平四郎と養母、平四郎と杏子、杏子とその夫などといった複数の男女関係を様々な挿話を通じて描いているのが、この『杏っ子』である。これらの男女関係における性のあり方については、例えば中川成美「家族のセクシャリティー『杏っ子』」¹⁸などといった先行論もあるのだが、生身の身体とは異なる他者化された自己としての《電子メディア的 身体》を対象化する平四郎の性欲を本稿において問題にできたことで、『杏っ子』における性の問題をめぐる議論はより多角的なものとなろう。先に挙げた中川はその論の中で、「『杏っ子』は近代家族の誕生によって失われしめられた「家族のセクシャリティー」を描いた希有の小説である」¹⁹とし、近代の制度としての「家族」というものを問題にした。しかし同時にこの『杏っ子』は、電子メディアによって規定される聴取者の身体性という、また別の水準の「近代」をめぐる問題をも浮き彫りにするテキストであったことが、本稿での検証によって明らかとなったのだ。

また、本稿第二節の冒頭でも触れていたが、この『杏っ子』が書かれ発表された1950年代は、国民的なメディアがラジオからテレビに移行する時期であった。テレビは、同じ映像表現媒体である映画とは異なり、日常的な空間の中で視覚的情報を受信することを観る者に可能にするメディアである。こうした性格を持つテレビの普及は、ラジオ登場期にはあり得た聴取の多様さや過剰さ——長田秀雄や萩原朔太郎らに見られた「肉」への関心に基づく聴取など——が平準化されて自動化したラジオ聴取というものを再編する契機を伴うものであった。その点に、平山平四郎のような聴取者の欲望と実践が1950年代に言語化された必然性がある。ラジオというメディアを利用する国民の身体の再編が自ずと求められることになるこの時期だからこそ、ラジオ利用をめぐる過剰さを問う土壌が用意され得たのだ。

18

中川成美「家族のセクシャリティー『杏っ子』」(『国文学』第42巻第12号、1997年10月)102～106頁。

19

同前、106頁。

20

1952年10月10日の室生犀星の日記。引用は、『室生犀星全集』別巻2、49頁。

21

和田伸一郎『存在論的メディア論 ハイデガーとヴィリリオ』（2004年、新曜社）。

22

同前、38頁。なお、原文には引用箇所の全てに傍点が付されてあったが、引用に際し傍点を省略した。

23

同前、35～36頁。

実は『杏っ子』を通して問題にされた身体の分裂は、『杏っ子』の作者・室生犀星においても経験されたことであった。犀星は1952年に放送局から出演（事前に録音したものを放送する）を依頼され、10月10日に自分の声をラジオで聴くことになった。そのときの印象を日記に次のように綴っている。「はじめて自分の声を録音で聴いたが、別人の声のやうで少しも可笑しくなかつた」²⁰。録音された自分の声を「別人の声のやう」に聴いてしまった室生犀星はこのとき、録音された音声の発話主体にうまく同一化できずにいる。「別人」という、他者化された自己と遭遇したという意味で、電子メディアに接続することによる自己分裂的な経験を、犀星もまた被ったのだ。

以上において論じてきたような、ラジオ聴取者の身体の分裂について考える上で、和田伸一郎『存在論的メディア論』²¹の議論が参考になる。ラジオについての直接的な言及はないが、映画を見たり電話で話をしたりする者が抱く〈不安〉が、ハイデガーの〈現存在〉という鍵概念の援用を通じて論じられている。和田は、電話通話者の欲望を、「話したいという欲望である以前に何よりも、遠く離れたまま―〈つながる〉こと、遠方にいる相手との間の隔たりがないに等しい状態につくりだすことへの欲望」²²とし、通話者の「身体の分裂」について次のように言及する。

「私」は、「ここ」にいるという〈物理的な〉状況の確実性よりも、どこか遠方にいる誰かと話している〈仮想的な〉状況の確実性を選ぶ。「ここ」にいる自分の生身の人間よりも、どこかにいる相手と声を交換している〈仮想の〉身体の方を選ぶのである。一方の電話に完全に参加している私は、他方の「ここ」で受話器を手にしている私自身を忘れる限りにおいて、完全に参加できるのだ。（略）電話とは「向こう」にいる人の声を「ここ」で同時に聴かせることを可能にするメディアであるが、「向こう」と「ここ」のあり得ない一致は、その代償として仮想的身体と生身の身体の分裂を利用者に要求する。²³

和田がここで展開した電話論は——もちろん電話とラジオというそれぞれのメディアの性格の区別は必要であるにせよ——ある程度ラジオについても適用できる。電子的な音声メディアの利用者が抱く、相手との隔たりをなくしたいという欲望が、そのメディア利用者の身体を「遠方」と「ここ」という二つの空間に引き裂く契機となるのである。ただ、和田が二つの空間・身体を問題にする際に「仮想的」という語を用いてしまっている点については注意が必要だ。電子的な音声メディアの利用者が電子メディアが可能にする空間に構成した身体は、物理的な生身の身体の側の方に立脚して見れば確かに「仮想的」だと言えよう。事実、本稿における《電子メディアの身体》への焦点化も、仮説的＝仮想的である。しかし本稿で確認した『杏っ子』の平四郎のラジオ聴取は、そのような一見「仮想的」に見えるような身体にこそ「肉」があることを示唆している。つまり、「仮想」という用語だけでは掬い取れない肉質性・物質性と叫ぶべきものが、電子メディアによる空間において成り立ちうることを、平四郎のラジオ聴取は意味していた。

メディア利用を通じていわゆる「仮想的」なものが実在感を持つような状況が引き起こされるという問題は、今日的な文脈においてはより重要な問題とされている。社

会学者の鈴木謙介は、現代のインターネット利用者の経験に内在する問題を取り上げた『ウェブ社会の思想』²⁴の中で、「身体に対する直接的な刺激が得られるわけでもないテキストによる性行為」²⁵に着目し、このような「性行為」に人々が興奮する理由を、「わたし」という存在の本質的な部分^{バーチャル}だけが、言語として送られ、送り返されている」²⁶点に見ようとする。また鈴木は同書でアバターサービス²⁷についても触れ、仮想的なネット上の空間に存在する「アバター」を「現実のわたしではなく、「わたしという人間の本質」を表現するもの」²⁸であるとしている。このように、現実的な身体を離れた仮想的な世界の側に「わたし」の「本質」が存在するという状況が成り立ち、それが恒常化するならば、むしろそのような仮想的な世界にこそ“ほんとうの「わたし」”が存在するのだと認識し、仮想的なるものに実在感＝リアリティを感じるメディア利用者が現れるのは当然だろう。『杏っ子』の平四郎のメディア利用は、仮想的な世界をリアルに捉える今日的なメディア利用者の経験を、図らずも先取りするものであったのだ。PCやケータイといった現代のデジタル・ガジェットを介するのではなく、よりプリミティブなラジオを介して身体の分裂とその実在感を問題にしているところに、平四郎の欲望を評価するポイントがある。『杏っ子』というテキストにおいて「肉声」や「現前」を問題にすることは、このテキストを現在に向けて開くという意味において、意義のあることであった。

繰り返そう。私たちは、ラジオという電子的な音声メディアを通じて肉声を聴くことなどあり得ない、と考える傾向にある。なぜなら、メディアによって音とその発信者の身体とが切り離されることになるという理解を、私たちが共有しているからだ。しかし、ラジオから「肉声」を聴くことが成り立ちうるのだという仮説に拠り、ラジオの音声は「表象＝再現前」ではなく「現前」以外の何ものでもないような状況に光を当てることで、発話者と受話者の身体性をめぐる新しい問題が浮き彫りになったのである。『杏っ子』の平山平四郎のラジオ聴取のあり方が、そのことを示してくれる。

付記

本稿は、二〇〇九年度室生犀星学会春季大会(2009年5月10日、石川四高記念文化交流館)における口頭発表「ラジオの声と身体性 女性の声に対する室生犀星の想像力」に依拠している。発表後に多くの方々より貴重なご意見を賜った。記して感謝申し上げたい。

24 鈴木謙介『ウェブ社会の思想 (遍在する私)をどう生きるか』(2007年、日本放送出版協会)。

25 同書、63頁。

26 同書、66頁。

27 アバターサービスとは、オンライン上のカスタマイズ可能なキャラクター「アバター」によるコミュニケーションサービスのこと。米リンデンラボ社運営の「セカンドライフ」が有名。

28 鈴木謙介『ウェブ社会の思想』、71頁。